

◎家庭問題扱ったシノドスが閉幕

【C J C = 東京、10/26/2015】家庭問題をテーマにバチカン（ローマ教皇庁）で10月4日に開幕した『世界代表司教会議』（シノドス）は24日、翌日の閉会ミサを控え、最後の全体会議が行なわれた。

今回のシノドスは、「開かれた教会」を掲げる教皇フランシスコの意向で開催された。

午前中の会議では、今シノドスにおける司教たちの意見・提案をまとめた最終文書となる「提言書」が読み上げられた。この提言書は、最終文書起草委員会によって段階的に準備され、前日、同委員会の全員一致により承認されたもの。

「提言書」には94項目が盛り込まれた。シノドスでは、教義の厳格適用を求める保守派と、現実的な対応を主張する改革派との対立が浮上したが、再婚信徒については、教会から排除せず、受け入れるよう、改革派の意見が盛り込まれた。

再婚信徒が「破門されたと感じてはならない」「（教会に）より統合されなければならない」と強調され、再婚信徒に聖体拝領を認める条件は明記していないが、離婚理由など個々のケースに応じ、具体的な対応を考える方向を打ち出した。

同性愛者については「不当な差別的烙印を受けることを避け、尊重されなければならない」としながらも、同性婚の合法化を、カトリックの結婚、家族と「同一視または類似のもの」とみなす根拠は存在しないと、同性婚を認めない立場を貫いた。

同じ午前の会議で、『中東・アフリカ・ウクライナの状況に対する共同声明』も発表された。

教皇はあいさつで、カトリック教会内の意見対立を認めながらも、現代社会において家族が抱える問題に教会が「見て見ぬふりをせずに」取り組むよう促した。

また、「教会の第一の責務は非難や破門を言い渡すことではない」とし、さらに司教会議では「教会の教義の裏に隠れようとする閉ざされた心がむき出しになった」と保守派の言動を批判した。

シノドスは25日のミサで正式に閉幕した。

今回の提言を踏まえ、教皇フランシスコは「家族」に関する文書をまとめる。教皇はシノドスの提言に従う必要はないが、シノドスで繰り返し示された方針転換拒否の動きからも、教義の大幅変更は難しくなったと見られる。

解放の神学

Overview

- ・ 神学とコンテキスト
- ・ 解放の神学の成立の背景
- ・ 解放の神学の特徴
- ・ 解放の神学の影響史

神学とコンテキスト

- 〈誰が〉
 - 〈どこで〉
 - 〈何のために〉
 - 〈どのような〉
- 神学を必要とするのか

西欧キリスト教の伝統では、真理の「普遍性」が強調されてきた。
→ コンテキストの軽視

解放の神学の成立の背景

ラテンアメリカの状況

- ・ 過酷な植民地主義の傷跡
- ・ スペイン・ポルトガルの入植者たちは、先住のインディオたちから土地と文化を収奪し、奴隷化した。
- ・ 北半球（特にアメリカ）に依存せざるを得ない経済システム
- ・ 開発主義（1950～60年代）がもたらしたもの
- ・ 軍事独裁政権と多国籍企業 → 民衆の貧困と抑圧

解放の神学の成立

- ・ 前提としての「民衆」：「キリスト教基礎共同体」における活動
- ・ **第二バチカン公会議**（1962-1965年）
 - ・ 教会と現代世界との対話（カトリックの現代化）
 - ・ 諸教会の一致
 - ・ カトリック教会自体の回心
- ・ 第二回ラテンアメリカ司教会議（コロンビアのメデリン、1968年）
 - ・ グスタボ・グティエレス（ペルー、1928-）が「**解放の神学**」を提唱。

G. グティエレス『解放の神学』（1971年）

- ・ キリストは、終末論的約束を霊的なものとはしない。
- ・ J.モルトマンの「希望の神学」を評価。
- ・ 希望は歴史的实践のただ中に根ざしたものでなければならぬ。そうでなければ、希望は単なる逃避、未来の幻想にすぎない。



解放の神学の特徴

解放の神学の特徴

- ・ 聖書を読み直す主体は「民衆」である。
- ・ 「民衆」＝貧しい人々
- ・ 聖書の解釈そのものより、「聖書による」人々の生活の解釈（理解）の方が重要とされる。

「罪」とは？

- ・ 貧困や抑圧などの不正義を（**制度化された暴力**）による〈罪の状態〉とした。
- ・ 内面的な罪のみならず、現世的・社会構造的罪からの解放と、より人間的・福音的な社会への解放を目指す。
- ・ **マルクス主義**を方法論として用いる。
 - ・ 1) 経済的要因の重要性。2) 階級闘争への着目。3) イデオロギーの力への注目
- ・ 1980年代、バチカンから、マルクス主義との関係を厳しく批判された。その急先鋒はヨーゼフ・ラッツィンガー（前教皇ベネディクト16世）。

「貧しい人々」の優先的立場

- ・ 貧しい人々＝政治的・経済的な被抑圧者。
- ・ 近年の解放の神学は「階級的」概念を越えようとしている。
 - ・ 「貧しい人々」＝黒人、先住民、女性。
- ・ 貧しい人々を選択するための神学的根拠
 - ・ 神論的根拠：出エジプト記 3:7-10 「彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った」
 - ・ キリスト論的根拠：ルカ福音書 6:20 「貧しい人々は幸いである」、7:21-22
 - ・ 終末論的根拠：マタイ福音書 25:40 「最も小さい者の一人にしたのは、…」
 - ・ 使徒的根拠：ガラテヤ書 2:10 「貧しい人たちのことを忘れないように」

出エジプト記 3:7-10

主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の**苦しみ**をつぶさに見、追い使う者のゆえに**彼らの叫び声**を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを**圧迫する有様**を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。

ルカ福音書 6:20, 7:21-22

さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。「**貧しい人々**は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。(6:20)

そのとき、イエスは病気や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやし、大勢の盲人を見えるようにしておられた。それで、二人にこうお答えになった。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。(7:21-22)

マタイ福音書 25:37-40

すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなざったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの**最も小さい者**の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

ガラテヤ書 2:10

ただ、わたしたちが**貧しい人々**のことを忘れないようにとのことでしたが、これは、ちょうどわたしも心がけてきた点です。

「神の国」とは？

- ・ 神の国は歴史的解放の中に待望され、受肉する。
- ・ 解放の神学によるイエス理解と、最新の聖書学によるイエス理解（史的イエス研究）は接近している部分がある。

解放の神学の影響史

- ・ フィリピンの反マルコス独裁闘争（1986年）
- ・ ピープル・パワー革命
- ・ 韓国の民衆神学による民主化運動（1970年代）
- ・ 南アフリカにおける反アパルトヘイト闘争
- ・ 1990年、アパルトヘイトの終結を宣言。1994年、マンデラが大統領に就任。
- ・ 黒人神学、フェミニスト神学

解放の神学からの問いかけ

- ・ 「貧しい者」「虐げられた者」から何を学ぶのか。その人々と共感共苦できるのか。
- ・ 「貧しさ」が持つ（救済論的）意味の探求
- ・ 支配的力を相対化するための方法の模索
- ・ 資本主義へのアンチテーゼ
- ・ 土着文化（基層文化）が持つ解放的エネルギーへの気づき
- ・ アニミズムやシャーマニズムの（批判的）再評価。
- ・ ラテンアメリカにおけるペンテコステ派（癒やしを強調）の急成長との関係。

【参考文献】

- ・ グスタボ・グティエレス 『解放の神学』 岩波書店、1985年。
- ・ レオナルド・ポフ、クロドビス・ポフ 『入門 解放の神学』 新教出版社、1999年。
- ・ 栗林輝夫 『現代神学の最前線——「バルト以降」の半世紀を読む』 新教出版社、2004年。